

(令和3年7月試験研究業務月報)

試験研究課題名：京都府^{そさいげんしゅ}蔬菜原種審査会（ミニトマト）

情報

第67回^{そさいげんしゅ}京都府蔬菜原種審査会（ミニトマト）を開催

7月16日、当センターにおいてミニトマトを対象とした京都府^{そさい}蔬菜^{げんしゅ}※1原種※2審査会を開催しました。本審査会は現場での生産に適した優良野菜品種の開発普及を促進することを目的に京都府種苗協会が主催するもので、当センターは審査に向けた栽培と審査会の運営及び審査を務めました。

当日は、府内種苗会社5社から出品された10品種について、農林センター園芸部、農産課、各種苗会社、卸売会社の審査員13名が、ほ場での生育状況、収穫物及び果実の食味を審査した結果、玉揃いが良く、食味の良好な3品種を入賞品種として選定しました。また、今回の審査会は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、一度にハウスに入る審査員の人数を制限するなどの対策をとりつつ開催しました。

今後は、収穫調査や果実品質調査の結果と併せて府内産地への情報提供に努め、野菜生産を支援します。

- ※1 ^{そさい}蔬菜：野菜
- ※2 ^{げんしゅ}原種：販売用に増殖を行う前の品種



^{たちげ}立毛審査の様子

審査員を2班に分けて人数を制限



1等に入賞したミニトマト

(令和3年7月試験研究業務月報)

試験研究課題：開発農地における新規作物の導入

研 究

開発農地に適するニンジンの品種および栽培技術の検討

丹後地域では、開発農地を中心にキャベツ等のアブラナ科野菜の加工契約生産が推進されており、その結果、根こぶ病の多発等、連作障害が問題となっています。そこで当所では、アブラナ科以外の品目としてニンジンを取り上げ、収量性、秀品率などを調査し、品種の検討を行うとともに、被覆栽培による抽苔の抑制など、開発農地に適した栽培方法の検討を行っています。

今回は、収穫調査を実施し、収穫したニンジンを生産部会の会員に見ていただき、研究の進捗状況を報告しました。

今後も定期的に生産者部会へ研究結果を報告し、生産現場と一体となって開発農地に適したニンジンの品種、栽培方法を検討します。



収穫調査を実施



出荷目合わせ会にて研究状況報告

農林センター（丹後農業研究所）

府内小学生に宇治茶の魅力を発信～夏休み自由研究プロジェクト～

宇治茶の情報発信拠点である当所は、府内小学生に宇治茶の魅力をより深く知ってもらおうと、本年度で3回目となる夏休み自由研究プロジェクトを7月27日～29日に開催しました。

プロジェクトでは、自由研究テーマとして宇治茶を取り上げてもらい家庭で学ぶ機会を提供するために、親子で一緒に学べる2つの体験コース（①茶園の虫を観察しよう、②お茶を鑑定し成分を測ろう）を企画し、7家族27名（うち小学生16名）に参加いただきました。

参加者は、「いくつもの種類のお茶を飲めてとても面白かった」「抹茶をしゃしゃかした（茶筌で点てた）のが楽しかった」「日頃なにげなく飲んでいるお茶について、親子で一緒に学べる機会ができ、お茶の奥深さについて新たな発見があった」と大変喜ばれていました。

当所では、研究所の特徴を活かした宇治茶の情報発信を続け、宇治茶ファンの裾野を広げることで、茶業振興に貢献していきます。



品質の異なる抹茶を飲み比べ



お茶の審査に挑戦



分析機でお茶の成分を測定



茶園にいる虫をつかまえよう！

(令和3年7月試験研究業務月報)

試験研究課題：熟果生産に適した伏見とうがらし F₁ 品種の育成

研 究

伏見とうがらしの新品種有望系統について評価しました

当センターでは、伏見とうがらしの赤色熟果の生産で問題となる、草勢の低下やしおれ果の発生などを改善した新たな F₁ 品種*の育成に取り組んでいます。

今年度は、無加温ハウス栽培における果型や収量性等を評価するため、昨年度選抜した7系統を当センター内のビニルハウスで栽培しています。

7月14日には、府内の農業関係者と7系統の生育特性、果型及び食味について、意見交換を行いました。その結果、果型、食味の点で伏見とうがらしより評価の高い系統がありました。

今後も調査を継続して、有望系統をさらに絞り込む予定です。

※ F₁ 品種…異なる2つの品種または系統を交配して作られた一代雑種品種のこと。両親の特長を受け継ぎ、両親より生育が旺盛で収量も多くなる。



生育特性の評価



食味評価試験

南陽高校で出前授業を開催しました

7月17日に南陽高校において「夏季実習プログラム・生命科学実習」の出前授業を開催し、高校1年生6名、教諭2名が参加しました。本プログラムは、高校生を対象に、最先端の農業技術を学び体験することを目的としたものです。

当日は、「バイオミメティクス・バイオデザイン[※]」に関する講演を行いました。参加者からは「生物機能がどのように応用されるのかが分かった」「自分も新しい見方で生物を観察したい」等の意見が出され、生物機能の利用方法について理解していただくことができました。

今後は、引き続き若い世代が新しい農業技術に興味をもってもらうために、実習などの技術支援をしていきます。

※ バイオミメティクス・バイオデザイン…生物の機能を学び、もの作りや街づくりなどに生かす学問分野で、「生物模倣学」などと訳される。



南陽高校での授業風景

宮津市養老地区潜水漁業で新たな資源管理を実践

主にアワビを獲る潜水漁業は初期投資が少なく、新規就業者が始めやすい漁法として、沿岸漁業・漁村の振興上、重要な漁業です。一方、漁獲効率が高く乱獲に陥り易いため、適切に資源を利用するルールづくりが重要です。

夏期の潜水漁業が盛んな宮津市養老地区では、当センターの研究結果をもとに令和元年から殻長制限を10cmから11cmに高め、安価な3,4歳の小型貝中心から、高価な5歳以上の大型貝を中心に漁獲する合理的な漁業形態となりました。

一方で、近年若手漁業者の漁獲技術が向上しており、過剰漁獲が懸念される状況になってきました。そこで、本年7月1日の解禁に先立ち、当センターと地区漁業者が協議した結果、今期のアワビ類の総漁獲量が500kgに達した時点で漁期を終了する新しい取り組みを導入することとなりました。その結果、例年は8月中旬まで操業するところを、今年は7月25日に規定量に達し、昨年より多くのアワビを来漁期のために獲り残せたことを確認しています。今後、今期の取り組みの効果をより詳細に調査し、適切な資源管理の継続に繋げていきます。



大型のアワビを漁獲した漁業者



漁獲物調査の様子